

書道芸術

昭和五十年一月二十七日第三種郵便物認可
平成十九年十月二十五日
平成十九年十一月一日
発行

(毎月一回一日発行)

書道芸術

第五五九号



特集：書道芸術院秋季展

●第61回書道芸術院展
〔作品募集規定〕掲載

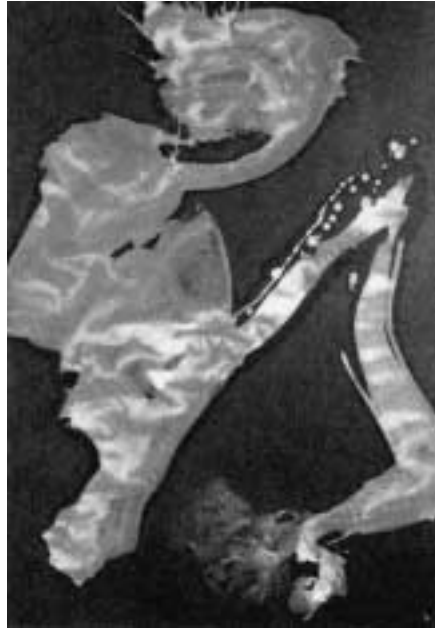
559'07.11

財団法人
書道芸術院

夫則夫仕自
夫仕自遠
夫仕自遠
夫仕自遠
夫仕自遠
夫仕自遠
夫仕自遠
夫仕自遠
夫仕自遠
夫仕自遠

書道芸術院 第1回展 出品作家

「一期一会」二曲



1976年個展 円通寺蔵

小川 瓦木

明治44年〜平成12年（1911〜2000）

千葉県白井町生まれ。上田桑鳩に師事し、昭和14年から2回にわたって大日本書道院展で金賞を受賞し、事実上の書壇デビューを果たす。書道芸術院創設に関わるも、昭和15年上田桑鳩とともに奎星会の結成に参画し、以後、会を中心に作品の発表をし、機関誌「奎星」の編集も担当した。師の書作精神を受け継ぎ、国内外での個展、国際美術展で多くの作品を発表してきた。戦後、キャンバス地に油彩で描いたり、ラッカーを使用したりといった、様々な材質や表現方法を試み、アルミ板工芸、染色、エナメル仕様も行うなど、先鋭的な表現方法を追究していった。この時代はほとんど非文字性の作品であったが、昭和40年代後半になり、黒無地の用紙にカラーで表現する独自のスタイルを確立する。掲載の「一期一会」も黒地に色を使ったものであるが立体感と筆の動きが鮮やかに現われている。

その後、奎星会、毎日書道展を離脱し、書研社を設立、また同年東洋書芸院を設立する。平成12年の亡くなるまで、精力的に活動を続けた。常に、造形芸術としての書に向かい挑んできた氏だが、「書が書であるためには創造があり人間がいなければならぬ」という氏の精神は、現在の書道芸術院に確実に受け継がれているとは言えないだろうか。

（千葉蒼玄記）

書のひろば

理事長 恩地春洋

アイルランド展作品

有名美術館に寄贈

好評で人気のあった創立60周年記念アイルランド展の作品が、ダブリンの中東・アジア美術品のコレクションで有名な「チェスター・ビーター・ライブラリー」という美術館に寄贈する話がまとまると、大使館から連絡がありました。

なお、11月15日に、同ライブラリーで行われる月岡芳年浮世絵版画展オープンの日、その席で林景一大使がスピーチして、書道作品の寄贈を行う予定とのことです。

同ライブラリーは、不定期の展示や

10/5「書の世界」はじめて大阪本社版に掲載される



ワークショップなどの際、使用したいと考えているようです。

10・24 在アイルランド大使館
広報文化班 小林 隆史

「書の世界」全国版に

懸案となっていた毎日新聞に毎日金曜日連載の、金子鷗亭先生題字の「書の世界」の大阪本社関係版に掲載することが遂に実現した。

これで北は北海道から南は九州・沖縄まで、最新ニュースが全国に伝えられることになった。

この記念すべき全国版第1号に書道芸術院秋季展掲載分が採用された。

掲載誌の切り抜きはご覧の通り。

(10・5(金)大阪版)

芸術の秋 幹部役員奮闘

◇第二回日中女流書家代表作家展

今回は、北京の中国美術館で先に発表され、来年は東京新国立美術館で毎日展の時期に開催される。

本年は開幕式祝賀会に訪中された方は約500名とも600名ともいわれる大部隊だった。(10/1〜3)

砂本杏花副委員長、香川倫子、下谷洋子、小伏小扇、小林琴水ほか(恩地春洋、尾形鼎山、千葉蒼玄)

◇第二回中国北京書道雙年展

10月16日〜23日 労働人民文化宮
中国美術館ほか

北京市書法家協会主催で色々な企画の含まれた書展で日本から全書連、毎日書道会、白扇書道会などと呼ばひかけがあり、恩地春洋、辻元大雲、大野祥雲、種谷萬城らが出品した。

・種谷萬城、辻元大雲が10月15日、17日、開幕式に出席し、日本代表としてセレモニーに参加した。



雙年展会場にて

◇千葉蒼玄さん北海道でショウに

札幌「丸井今井」でのショウに招かれて、10月27日出演、書の華麗な技を披露した。

〈千葉蒼玄〉プロフィール

日本にとどまらず世界からも注目を集める日本を代表する書道家。

題材に対してイメージを墨の形で表現する「墨象」を中心としている。根源を感じさせる壮大な作品には、伝統と未来をつなぐ世界観があり、

『払い込み手数料』 払込人負担についてのお知らせ

10月1日の郵政民営化に伴ない『払い込み手数料』が改定されました。

これまで誌代等の払い込みの手数料は、加入者(財書道芸術院で負担してまいりましたが、来年(平成20年)1月より、払込人の負担とさせていただきます。経費負担の関係上、何卒ご理解いただき、ご協力賜りますようお願い申し上げます。



日本の文化と精神の奥深さを、卓越した繊細な技を持って表現する。

〈コムサデモードのファッションショー〉
席上揮毫する千葉蒼玄氏

現代詩文書 (二)

広瀬 舟 雲

「自作のことば」にこだわっていた私は、90年代中頃から題材を海外の旅に移しました。

中国・インドネシアの旅に始まり、パリシリーズでひとつの山場を迎えます。96年のパリ・ロンドン旅行が契機となり、98年パリでの個展実現に至ります。

凱旋門の上に昇り、市街を見下ろすと



パリ個展「モネの睡蓮美」

広瀬舟雲書

世界を征服したような錯覚に陥ります。ピカソのアトリエや色々な美術館を訪問しました。まず驚いたのが芸術作品の陳列方法です。作品間隔がどんなに狭くても1m以上、場所によっては3mもあり、とにかくゆったり陳列されているのです。

そして歴史に名だたる巨匠の作品といえども、ほとんどがガラス越しにはなく直接みられるように陳列してあるのです。

日本の公募展等の陳列とは大違いです。「ここ（パリ）では、日本での肩書は一切捨てなさい。本物ならわかります。」

画廊主にいわれた言葉です。パリには世界各国から来たいろいろな芸術作品が満ち溢れています。文字が読める読めないということなんて関係ない。

目の肥えたパリの人々には、本物の芸術作品ならその良さが判るというのです。個展を直前に控えた私の

肩に重くのしかかると同時に一生忘れ得ぬ言葉となりました。芸術鑑賞の本質をついた名言だと思っています。この時、東洋人と西洋人の鑑賞眼の違いを学びました。

21世紀の書

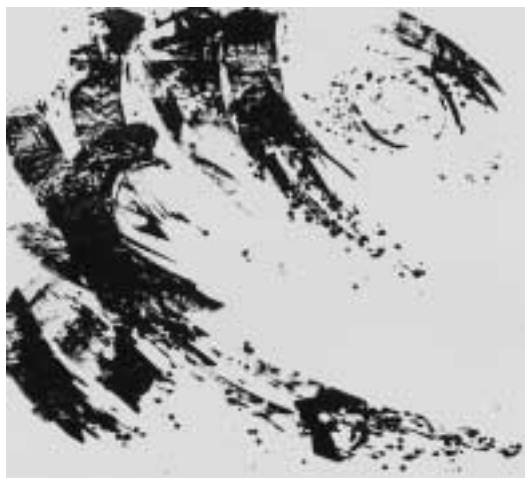
— 私 の 主 張 —

前衛書 (二)

阿部 蕙 芳

展覧会の会場の大小・作品サイズが随分異なります。それによって、どのような作品にしたらよいのか、準備に取り係りますが、常に自分のポリシーを前面に押し出しながら、計画、構成を進めます。

自分のポリシーは個性として発起していき、手法や筆法を重ねて行くことで自分の物へとしていくことが出来ると思います。



「流沙」

2005年書道芸術院秋季展

推薦作家出品作品

阿部蕙芳書

(156×174cm)

制作に当って、常に前進を求める努力をするが、思った作品は、そうは書けるものではない。特に新しい方向へと挑戦した時は多く、それを恐れているのは、前進することは出来ません。

この作品は、秋季展、推薦作家として大作を書かせていただきました。

サイズが大きいので動きを、どのようにして行くべきか悩みました。

そんな時、夜、テレビのシルクロードをぼんやり見ていました。天山南路タクラマカン砂漠が写し出され、その広大な砂漠の静けさと計り知れない、エネルギーを感じました。

これを書きたいと思いました。

書道芸術院秋季展

- 審査会員選抜作家作品
- 審査会員候補公募作品

会期 平成19年10月2日(火)～7日(日)
会場 東京セントラル美術館

秋季展実行委員長

小浜 大明

本年度の秋季展は、財団役員他の会員と審査会員選抜作品に加え、審査会員候補の公募という新企画により、10月2日から7日まで、東京セントラル美術館にて開催されました。同時に8階ギャラリーでは、東京総局による「巡回展」と「馨香会展」が催されました。

審査会員候補の皆さんから四百点近い応募がありました。恩地春洋、辻元大雲、大野祥雲、浜谷芳仙、黒川江偉子、宮澤梅徑の各先生方により厳正に審査され、入選と、本展の白雪紅梅賞と同格の菊花賞が選考されました。会期中の10月6日(土)には、入賞入選者の表彰式と、作品研究会、祝賀

懇親会が行われました。研究会は菊花賞受賞者の作品に対する思いや、取り組み、制作意図等の意見発表を中心に行われましたが、辻元大雲先生の進行により、種々の意見や考えが引き出され、充実した時間となりました。最後に、審査を担当された先生方よりアドバイスをいただき閉会いたしました。

研究会の後に行われた祝賀懇親会には、多数の会員と御来賓が参加してくださいました。恩地理事長の御挨拶の後、毎日書道会専務理事の寺田健一様、評論家の麻生泰久様、毎日書道会理事の岸本太郎様より御祝辞を賜り、毎日書道会理事の貞政少登様の乾杯の御発声で、和やかで楽しい会が開会されました。

盛会裡に終了できましたのも、諸先生方の御協力あればこそと、篤く御礼申し上げます。



表 彰 式



恩地会長あいさつ



祝 賀 会



研 究 会

〈巨による〉



常任総務 山口仙草

170×45cm

〈有水〉



常任総務 浜田尚川

177×59cm

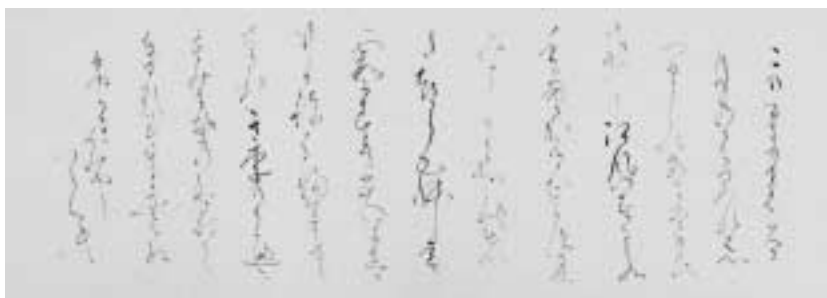
〈処〉



常任総務 泉雪華

120×90cm

〈秋〉



常任総務 山藤美和子

61×167cm

〈盲目の秋〉



常任総務 浜田堂光

53×171cm

〈緑の旗〉より

常任総務 佐藤無極



170×58cm

〈共〉

常任総務 三森慧香



90×120cm



〈遠い鏡〉 常任総務 飯沼恵鳳

60×180cm

〈言中有響〉

常任総務 最首翠風



94×94cm

〈念（となえる）〉

常任総務 新井京華



134.5×69cm

〈雲峰煌めく〉



総務 尾形澄神

178×53cm

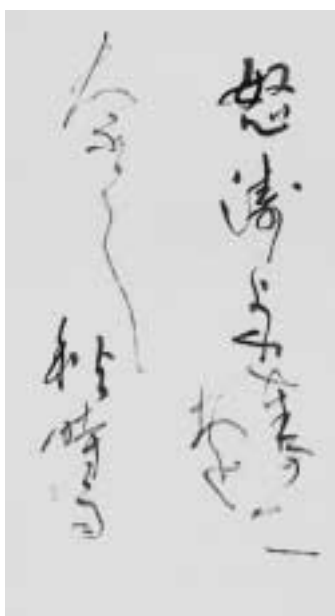
〈旅人かへらず〉



常任総務 畑中弄石

70×146cm

〈秋時雨〉



常任総務 大辻多希子

120×67cm

〈七言二句〉



常任総務 半田藤扇

176×55cm

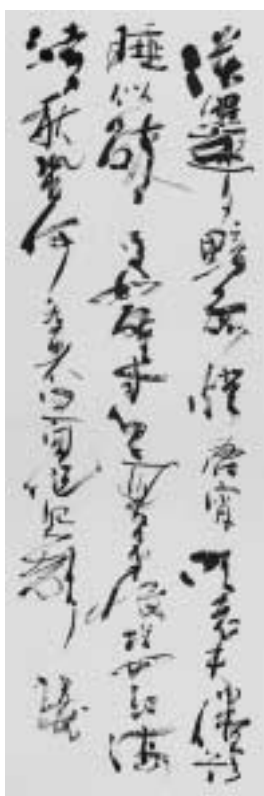
〈祈禱〉



総務 加藤如石

35×70cm

〈感秋〉



176×57cm

常任総務 生田翠龍

〈李白詩〉



178×52.5cm

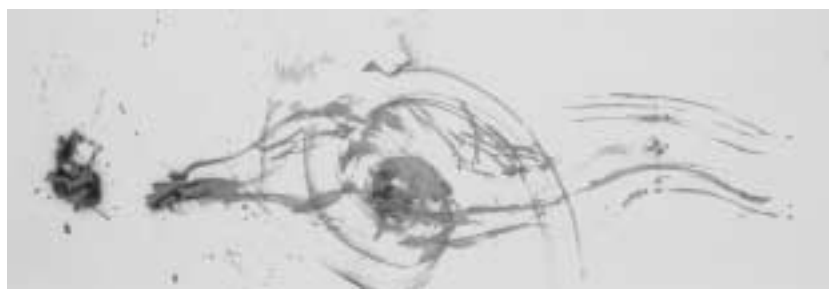
総務 井上始源

〈坐花〉

常任総務 東福青篁



70×136cm



〈宙(そら)〉 常任総務 太田蓮紅

61×182cm

〈玉泉観魚〉



常任総務 小山鳳来

50×120cm

〈岩そそぐ〉



常任総務 朝倉春江

53×171cm

〈月到天〉



常任総務 萩原香扇

60×180cm

〈蝶の翔き〉



常任総務 田村鄭雲

148×68cm

〈晴日遊〉



審査会員 石川溪華

165×53cm

〈足(たる)〉



常任総務 大井美津江

138×70cm

〈純心〉



182×61cm

審査会員 工藤 永翠

〈魯郡東石門送杜二甫〉



175×52.5cm

審査会員 楠木 梅道

〈こども〉



120×90cm

総務 大平 邑峰

〈朱雀〉



総務 平岡 千香子

73×152cm

〈龍〉



121×91cm

常任総務 石田 春窓

審査会員候補
秋季
菊花賞

〈山峡に雪が舞う〉



審査会員候補・秋季菊花賞 芳賀 四 秀

61×182cm

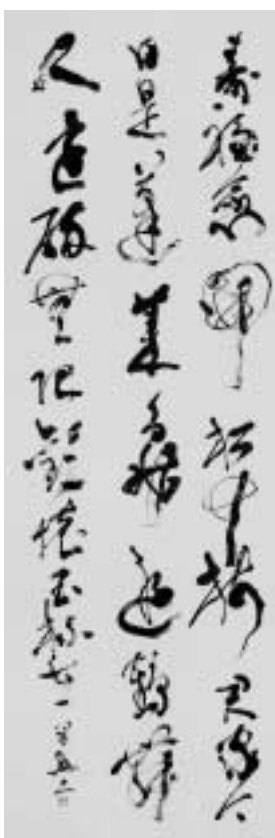
〈そのはしに〉



審査会員候補・秋季菊花賞 山本 由美子

58×179cm

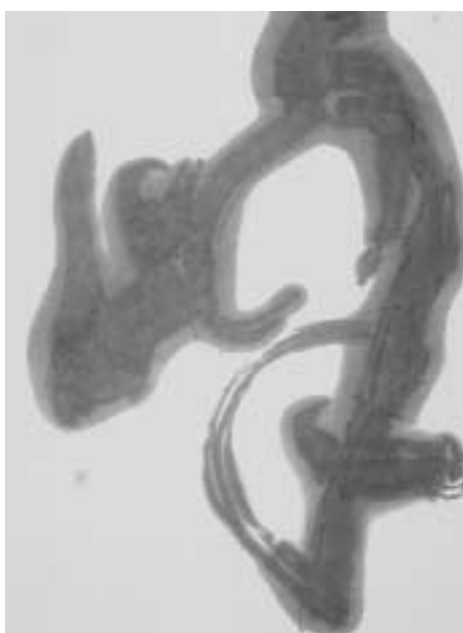
〈寿福愈〉



審査会員候補・秋季菊花賞 濱野 琴 爽

165×53cm

〈峰〉



審査会員候補・秋季菊花賞 三井 白水

120×90cm

〈七言二句〉



審査会員候補・秋季菊花賞 佐藤 星 沙

173×53cm

審査会員候補
秋季菊花賞

〈灼〉



審査会員候補・秋季菊花賞 大原 律子 91×121cm

〈風・渡る〉



審査会員候補・秋季菊花賞 千葉 華紅

181.5×50.5cm

〈音楽会の後〉



審査会員候補・秋季菊花賞 高橋 瑞華 70×136cm

〈光風〉



審査会員候補・秋季菊花賞 中塩 朱華

182×61cm

〈市〉



審査会員候補・秋季菊花賞 塚本真由美

182×61cm

〈海〉



審査会員候補・秋季菊花賞 下村 春香

121×91cm



用紙 半紙普通判

＝注＝

漢字研究部競書作品は、左の法帖の中から

何文字臨書してもよい。

（掲載部分以外は不可）

※落款を必ず入れる

署名、もしくは

〇〇臨

（押印のみ可）

＜解説＞

この薦季直表は、真賞齋帖（火後本）巻上である。全19行。

鍾繇とすれば71歳の書であり、書格の高いことは諸家の意見の一致するところである。点画が短く太く、しかも字形が幅広で、胴中が張っているため、ずんぐりとした感が強い。（編集部）

＜釈文＞

敵喪膽。我衆作氣。旬月之間。廓清蟻聚。當時實用故山陽太守關内侯季直之策。尅期成事。不差豪髮。先帝賞以封爵。授以劇郡。今直罷任。旅食許下。素爲廉吏。衣食不充。臣愚欲

古筆鑑賞

44

かな研究部

小島切

(伝 小野道風)

②

用紙 ・ 半紙普通判 (料紙可)

〈たて長に使用〉

〈よみ〉

く(久)だり(利)た(多)ま(万)ふ

(布)ころなるべし(八)らへ

御返は(者)いせ(勢)より(利)

す(春)ゞか山おとに(尔)き(支)ゝけ

(介)る思に(尔)より(利)も(毛)ころ

のやみに(尔)ま(万)とひぬるか(可)な

(奈)

おほ(保)ん(无)か(可)へし

さ(散)ゝが(可)に(尔)のいが(可)き

(支)のは(本)どは(盤)へだ(多)つ(徒)

とん(元)ころ

ば(者)へだ(多)に(尔)た(堂)え(衣)し

とぞ(曾)思ふ(婦)

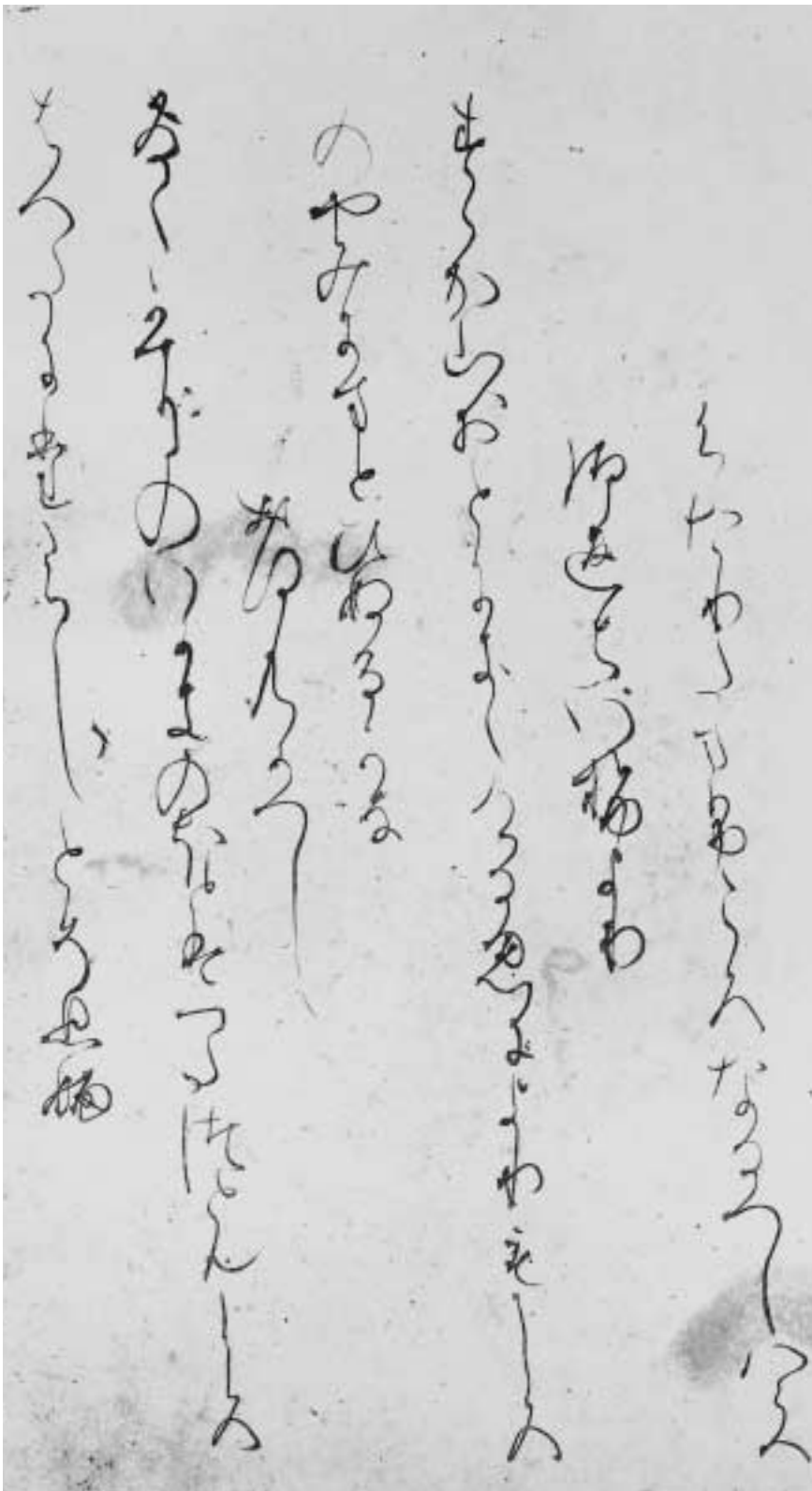
〈解説〉

小島切の名称の由来は、もと本阿弥光悦の門人で、茶人でもあった小島宗真の秘蔵に因むもの。

また、小島切は、他の古筆と異なり繊細な表現を多く持つ。明るく細い線

・ 別紙を裁断して貼付は不可。
※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨 (押印のみ可)

の中に側筆を加え、この側筆が小島切に量感を与えて、繊細さをより一層冴えさせ、落着きを醸す要素にもなっている。(編集部)



※上の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。(全臨も可)

漢字規定 初段以上 【十二月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

最首翠風選書

習い方解説 (二)

最首翠風

隻手音声
せしゅおんじょう

——新しい書風に挑戦する段位の方の努力を見るのは楽しい。未完成的ながら気迫が伝わってくる。——これは本誌428号に書かれている恩地春洋先生の「漢字部総評」です。新しい書風を生み出す為の要素に、用具用材の工夫があります。今回の参考手本は硬い白狸の筆を用いました。私はこれまで自分の書風を、温かみのある豊かさに求めて来ました。しかし、この筆と出会って異なる自分を発見したように思います。

また、ある時、線の潤渇を極力廃した現代感覚の書に憧れ、思い余って筆の鋒を缺でカットしたことがありました。(勿論安い筆です)

前回の行書主体から今回は草書作品としました。基本的な草書体はぜひ覚えてほしいものです。



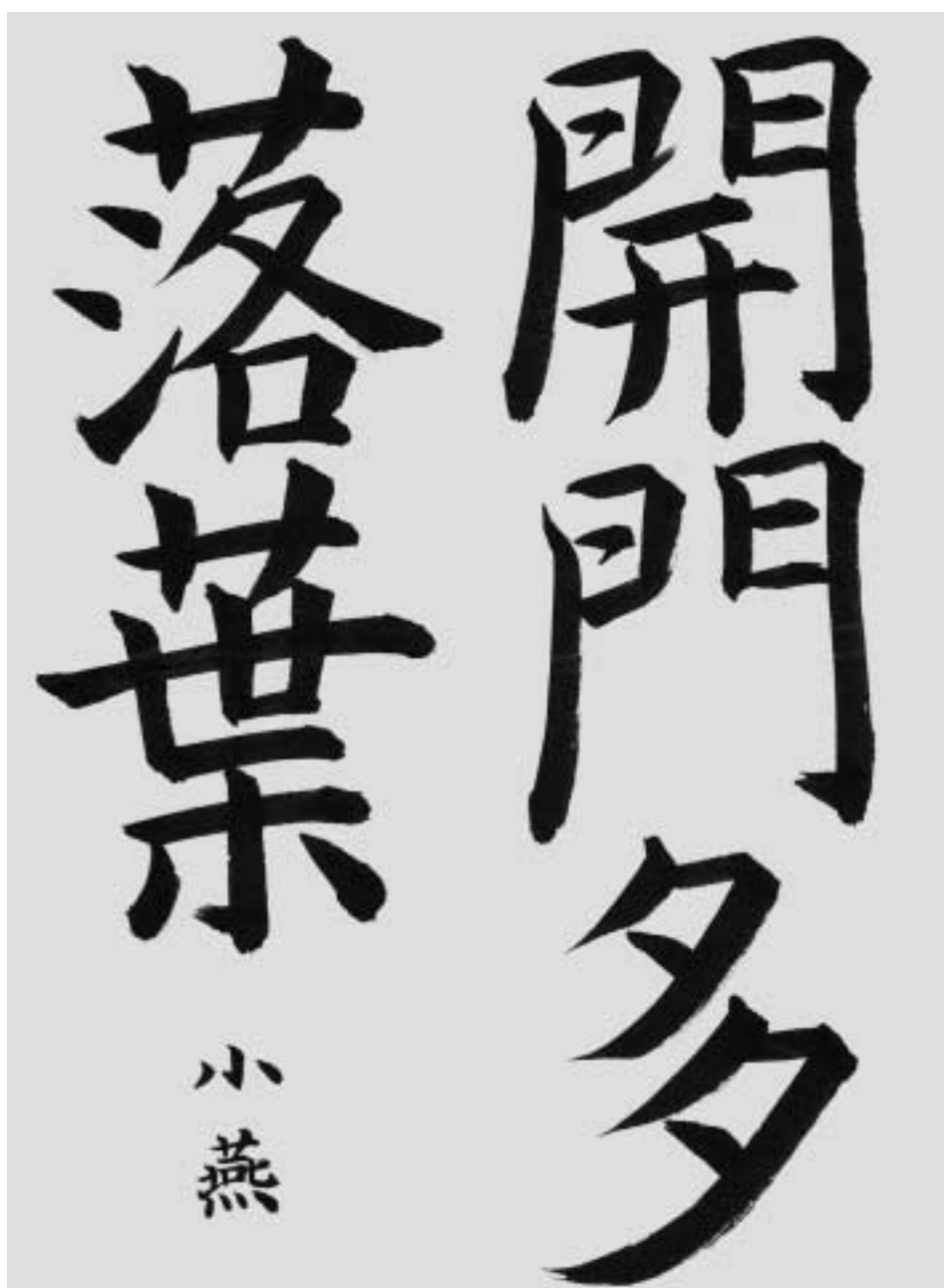
隻手音声

よみ (隻手音声)
せしゅおんじょう

書体 自由

漢字規定 秀級以下 【十二月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

稲垣小燕選書



開門多落葉

よみ (門を開けば落葉多し)

書体Ⅱ楷書

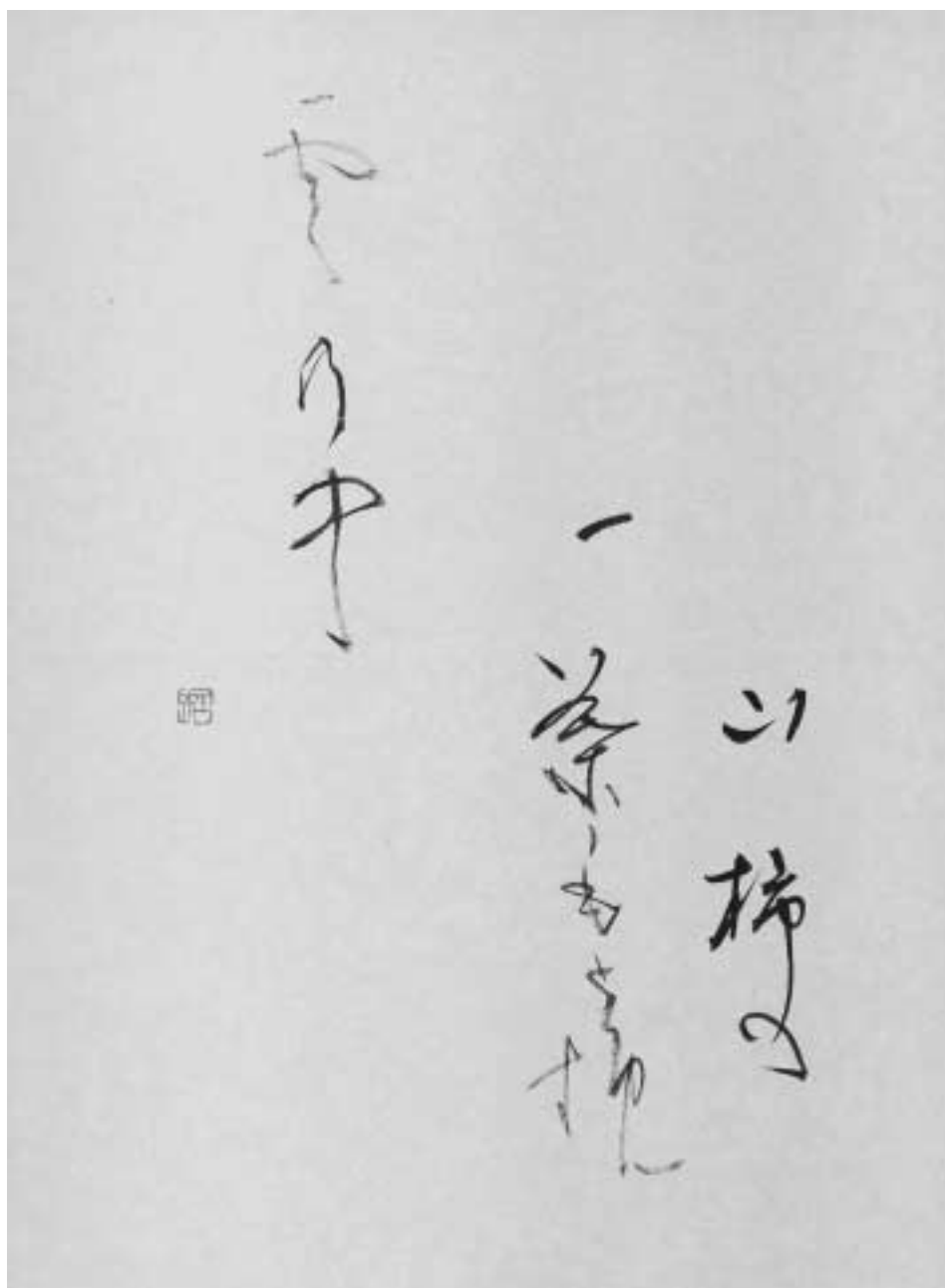
習い方解説 (二)

稲垣小燕

開門多落葉
(門を開けば落葉多し)

朝門を開いてみると、あたり一面の落葉である。深秋の幽寂な住まいの風情を詠んだもの。
沈着で強さを表現する為に「ねじれ」を確めつつ運筆してみました。「多」の字形に注意してください。「夕」は寝すぎないように、直線的に。

かな規定 初段以上 【十二月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判（料紙可） 黒川 江偉子 選書



よみ方 山柿の一葉も（毛）とめ（免）ず雲の（乃）中

創作

習い方解説 (二)

黒川 江偉子

山柿の一葉もとめず雲の中

（飯田 蛇笏）

秋の山の大自然が、赤い柿の実と雲といふ取合せにより素晴らしい一枚の絵となりました。

俳句を書く時、一番苦労する事は字数が少ないため、余白をどのようにに生かすかといふ事です。

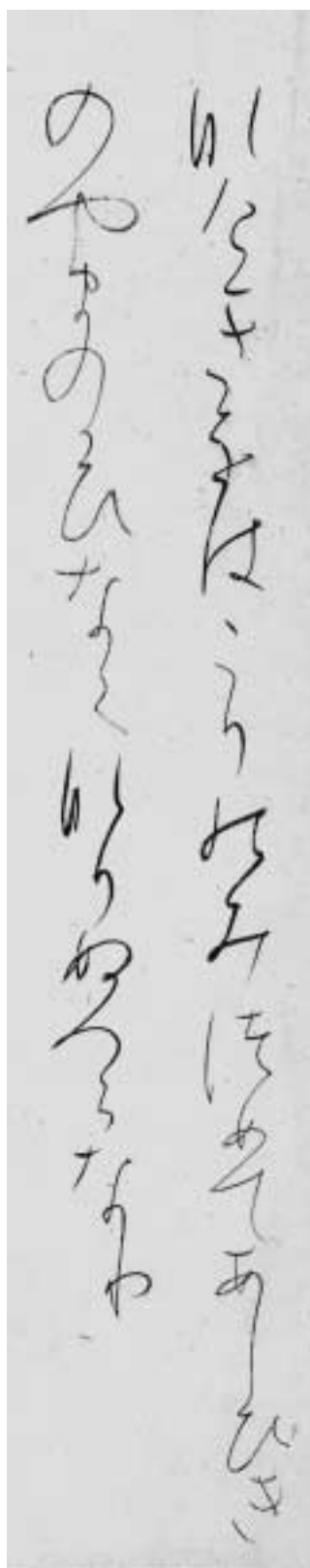
又歌と違って変体がなを余り使うと、句意が伝わらない場合もあり、その点をよく考えて書いて下さい。

この場合「山柿の」を潤筆で低く「一葉もとめず」で紙面の下方の集団にします。「雲の中」は上方にしました。この逆に散らしても可、この句の風景が少しでも感じられたら大成功です。

かな規定 秀級以下 【十二月十五日締めきり】 用紙 半紙タテ1/2 (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真のうたを全臨、または部分(二字以上の連綿)を臨書する。

高野 切第三種
(掲載写真縮小93%)

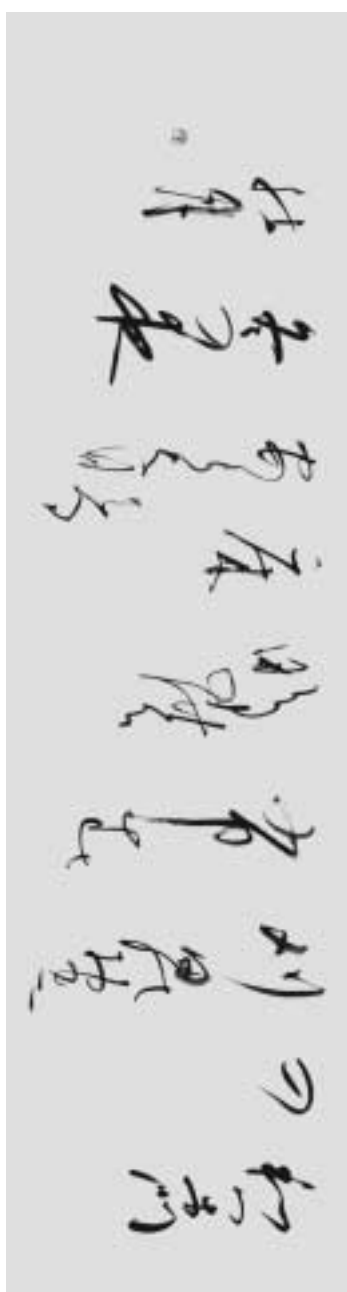


よみ方 な(那)げ(介)きをばこりの(能)みつ(徒)めてあしびき

のやまのか(可)ひなく(久)な(那)りぬべらなり(利)

かな条幅規定 【十二月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切(料紙可)

平川 峰子 選書



よみ方 わ(和)が(閑)門の刈田の(能)おもに(二)ふ(布)す(春)

鳴の(濃)床あらは(者)な(那)る冬の夜の(能)月

創作

習い方解説 (二)

平川 峰子

我が門の刈田のおもにふす鳴の
床あらはなる冬の夜の月

(殷富門院大輔)

我が家の門前にある刈田に伏している鳴の寝床は、冬の夜の月で頭わに見えます。

上部を揃える構成にしましたが下部余白の大きさに変化をつけるとおもしろくなります。変体がなの組み合わせを工夫したり前半と後半の二つのかたまりの散らし構成にするとか「月」だけ一文字にして三つのかたまりにすることも。

※よこ形式に限る

漢字条幅規定 初段以上 【十二月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

大野祥雲 選書

退筆如山未足珍 讀書萬卷始通神
萬卷始通神

退筆如山未足珍 讀書萬卷始通神

(退筆は山の如きも未だ珍とするに足らず 讀書萬卷始めて神に通ず)

書体Ⅱ自由

漢字条幅規定 秀級以下 【十二月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

小川弘舟 選書

秋聲天地間

弘舟書

秋聲天地間

(秋の声は天地の間にみち満ちた)

書体Ⅱ自由

習い方解説 (二)

大野祥雲

「ちび筆が山のようになるほど習字をしたとしてもそれは珍重すべきことではない。万巻の書を読んで、始めて神妙な筆蹟が生まれるのである。字を書くことより書物を読む方が大切。宋・蘇軾詩」蘇軾の書には大小・長短の工夫が見られ造型感覚が極めて近代的。私は用筆法、造形法とも「整える」ことを第一に楷書で書きました。

習い方解説 (二)

小川弘舟

秋聲天地間、「みわたすかぎり秋の声」秋の広大な天地を連想させてくれます。

今月は、六朝書の代表的楷書、龍門造像記を念頭に書いてみました。六朝時代には、この他にも張猛龍碑、高貞碑など力強く優れた楷書が多く残されています。用筆法は、方筆で厳しい線で書かれています。

習い方解説 (二)

祇園精舎の鐘の聲。諸行無常
の響あり。娑羅双樹の花の色。

盛者必衰の理をあらはす。

おごれる人も久しからず。唯春の
夜の夢のごとし。猛き者も遂には
滅びぬ。偏に風の前の塵に同じ。

「平家物語」より、書

用紙IIはがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体II自由

「平家物語」を取り上げました。ご存じの「源平の盛衰記」で、この叙事詩は、琵琶法師によって語られ、民衆に広く伝わり、後世の謡曲や浄瑠璃などに影響を与えたと言われています。

原作の雰囲気損わないよう単体で表現してみました。放ち書きでも、気脈が切れないよう注意し、画数の多い文字は、向勢にし、懐広く取るようにしました。

練習を重ね、文章を誦んじたら、参考手本を見ずに書くことをお勧めします。そうすることによって、気脈が無理なく通じ、字配りも巧くなって、読みやすい文章になります。

※落款を入れ忘れないようにしてください。(落款は自分の名前を入れてください。)

木一作品 各部総評

NO. 556

漢字部 師範 佐藤 初香

濃墨のねばりを生かし、ゆったりと表情を見せて余裕を感じさせる。味わい深い作で安定する。

◎漢字部総評 線質は色々な要素により変化する。用具の影響も大きい。肝心なのは運筆のリズム。普段からの鍛練が大切。(春洋評)



漢字部 師範 横井 正江

濃墨によるねばりある渴筆がリズムを奏で、味わいある行草表現。抑制のきいた運筆でひきしめる。

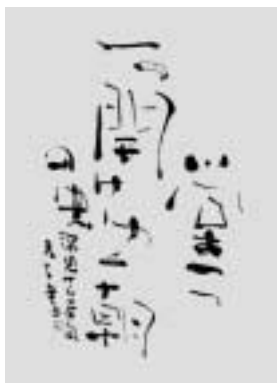
◎漢字部総評 条幅作品では全体のまとまり、序破急を紙面に盛り込む変化と統一が大切。潤渴肥瘦、大小等工夫を。(大雲評)



現代詩文書部 特選 水上 孝子

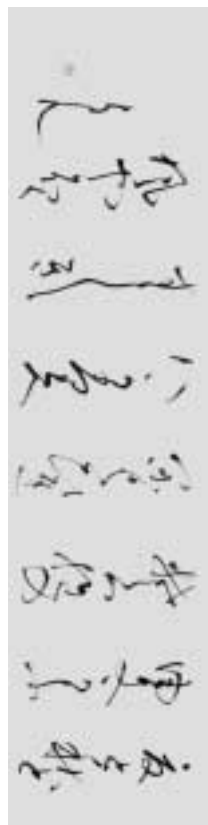
大らかで懐が広く余白が美しく響いている。字形も開放的にして気脈が通じ格調高い作品である。

◎現代詩文書部総評 一社中同じ作風が多い。指導者にもよるが、上級者は一考を要す。(素雪評)



かな条幅部 師範 山本由美子

創りすぎない字形で淡々と表現した結果の格調ある作品です。過剰でない魅力に引き込まれます。



前衛書部 特選 大野 礼子

懐が広くて渴筆で広がるリズムミカルな線質。ゆったりと味わいのある造形作に爽快感が満ちる。

◎前衛書部総評 書遊に取り組む姿が見られるが、前衛書の要は、造形・線質にある!! (芳仙評)



◎かな条幅部総評 字数、字粒を考慮して、筆のサイズを選ぶよう注意しましょう。変体かな運と連の混同が多かった。(明子評)

かな部 師範 堀江 幸泉

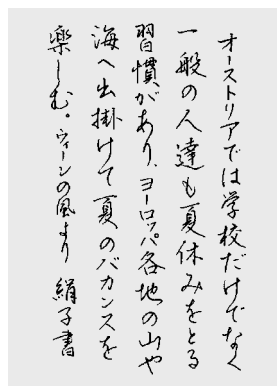
加工の強い紙に筆圧の加減を巧く操りリズム感が素晴らしい。文字の大きさと太細も適格で見事。◎かな部総評 小字の基本は連綿による快いリズムにあります。オリジナルな場合もまず滑らかさを念頭に構成しましょう。(洋子評)



ペン字部 師範 東平 絹子

重厚な線でどっしりと深さがある。流れもよく余白によく響く造形で暢達な作品である。

◎ペン字部総評 全体に細い線の作が多かったが、あまり細くすると弱さがみえてくる。重厚な線質で力強い作を。(蒼玄評)



オーストリアでは学校だけでなく一般の人達も夏休みをとる習慣があり、ヨーロッパ各地の山や海へ出掛けて夏のバカンスを楽しむ。ウィーンの風より 絹子書

今月の

特別研究部優秀作品(特選)

前衛書
(清流)

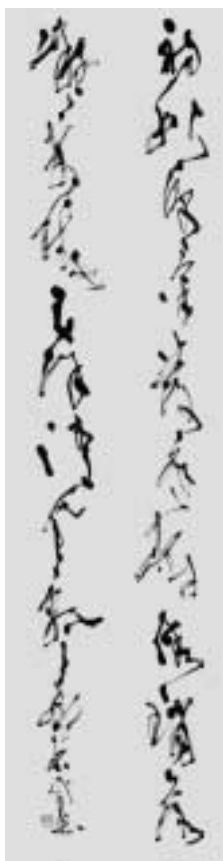
渋谷充律
「無」

漢字
(墨宣)

大川代香
「曹植詩」



渋谷充律書



大川代香書

◆ 迫力がある。白が美しい。が、奥深さが感じられない。少し書きすぎ？ 何かをそぎ落とすことを考えてみては如何でしょうか。
(明子評)

◆ 全身の力をこめて紙面を作り上げた感がある。下のかたまりが少々重すぎる感があるが中間の息つきを上手に表現したら引き締まったのでは。
(倫子評)

◆ 何よりも爆発力を持った作品に対する姿勢がよい。構成更に工夫を。墨のテクニカル光る濃さが、作品を浅いものにしていないだろうか。
(春洋評)

◆ 重厚かつ動きある線に存在感あり。紙面に盛り上げるマグマのようなエネルギーを感じさせてくれる。やや上下に二分した感があり、もう一工夫を。
(大雲評)

◆ ひきしめた字形で爽快な連綿草表現は鋭い筆致と共に技術の高さを物語る。潤渾の変化も自然でバランスよく、まとまりある作となった
(大雲評)

◆ 知的で計算されたものを確かな筆力で表現した完成度の高い作品です。希に見る真摯な作家に、敢えて遊び心を求め、次回作に期待大です。
(明子評)

◆ 固い筆を使われたのでしょうか。その結果生ずるかすが紙面に変化をつけてくれている目を楽しませてくれる。唯多くなるとうるさいかも。
(倫子評)

◆ 計算された変化は見事ですが、技術は技術としての評価はされましよう。更に人間表現まで目標を高めてほしいと願います。
(春洋評)

総評

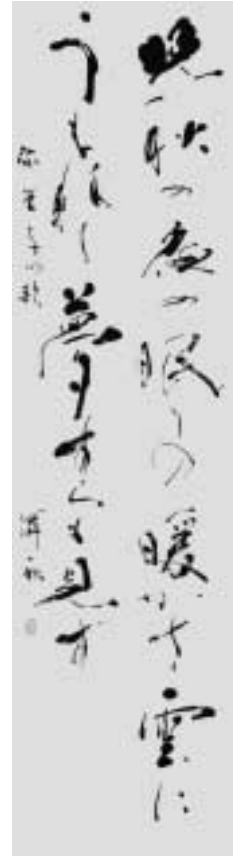
今月は79点(漢21、か8、現26、前22、篆2)の応募がありました。出品者に常連が目立ってききました。毎月、創意を持って、様々な作風に挑戦する姿勢に敬意を表します。書の創作の発想の原点は古典にあります。書の古典を真摯に学び、幅広く、高い鑑賞力を養うことが大切です。豊かで、洗練された表現力は、優れた鑑賞力が基礎となります。古典の学習を基礎として、現代に生きる作品を創作することを目指して下さい。今月の出品者の内には初めての出品者も数名見られました。今後、継続しての出品を期待します。(萬城)

〈特選候補者〉

漢	墨宣	鐫木	梅道
玄穹	千葉	紅雪	
玄穹	尾形	紅霞	
大雲	佐藤	希雲	
書景	岩崎	竹溪	
道	山藤	明美	
現	游水	荒川	空華
大雲	阿部	惠泉	
惠雅	板橋	雅邦	
炎佳	佐藤	華炎	
蒼原	熊谷	青山	
大拙	宇都宮	趙辰	
四谷	角田	悠香	
大拙	大庭	幸石	

現代詩文書 (大雲)
長島 僊雨

「弥生子之歌」



長島 僊雨 書

◆濃墨を使って表現された線は適度に細い線との組合わせで生かされ運動の多さを感じさせてくれる。欲を言うとき少々駆け足しの感じがします。(倫子評)

◆書く呼吸の深さに心の豊かさを感じます。扁平な字形と青墨の含ませ方が多いため、少し弱い感じになりました。文字の骨格を研究されては。(春洋評)

◆安定した筆力で、淡々と二行に書き穏やかな歌意にそった表現が生まれたのであろう。無理に創った箇所がないのが見飽きず好ましい。(明子評)

◆のびやかな筆致が鮮々しく、潤渇の変化も自然で無理がない。長鋒筆の柔らかさと弾力を生かした表現に技術の高さを感じさせて安定。(大雲評)

篆刻

(墨宣) 中山 無硯

「王維詩一節」



中山 無硯刻

◆技術的に刀の切れも安定してまとまっています。細部に問題はあるかもしれませんが、この方法を当分続けて強い線を追ってみては如何。(春洋評)

◆一寸五分角に五言絶句をパラスよく布字、刃えのある刀意と共に技術の安定を感じさせる。ややきれいすぎて味わいに欠ける点に工夫を。(大雲評)

◆小さな世界に深く重厚なものを感ぜさせられて楽しい世界です。落ちつきのある構成、確かな技術は、まさに宇宙へ誘ってくれます。(明子評)

◆画数の多少の変化を巧みに組み合わせて構成見事。白文の線の表現は難しいと思いますが、もう少し躍動した線が欲しいと感じました。(倫子評)

前衛書

(千葉) 渡辺 秋湖

「風の童子」



渡辺 秋湖 書

◆感性豊かに紙を切って爽やかです。構成がやや弱いように思いますが、この感性大切に、更に追求してください。集中力も十分です。(春洋評)

◆筆と一緒に紙の上を踊っているような感、墨色を変えてうす墨にして見ては如何? これからの季節の風になってくれるのでは。(倫子評)

◆楽しげに舞い遊ぶ子供のような雰囲気を感じる。軽やかな筆致で潤渇の変化も自然でよい。やや紙面の上辺の感触が目立ちすぎるか。(大雲評)

◆深く思い巡らす中、ふっと浮かんだものを、逃られないうちにすくいとて表現したような、軽快な魅力が心に残ります。そして美しい。(明子評)

漢字研究部 (案毅論)

選評 大野祥雲

今月のホープ作品



鉤 匡子

案毅論の結構や性情をくみとり、規模の大きい作品に仕上げています。各文字の始筆、終筆、払い、転折など要所々の表現も見事です。今後、鋒先を多面的に使い、鋭い線が紙深く入るよう一層書技を高めてください。

◎漢字研究部総評

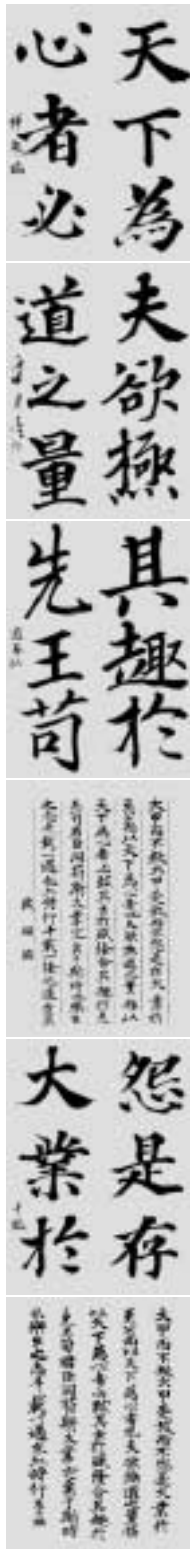
課題の臨本が小楷のためか、全臨に近い作品の出品が沢山ありました。なかでも神谷さ

漢字研究部 特選 鉤 匡子

んの作品は躍動感に富み光っていました。ところで、上位入賞者は見方、表現技法ともに優れ、よい学書をされています。多様な変化をもつ案毅論です。続けてがんばってください。なお、残念ながら下位だった方は、次のような特徴をもった文字が多いのでよく見て運筆を。○横画縦画の細太。○偏と旁が密着。○疎密の変化。○行書的な用筆など。



花雪 秋乃雪美子



千鐵 惠 子美昭春月泉



千翠 笑 華 芳一江子香子



澄千 紅 雅 惠泉理峰子卿

第61回 書道芸術院展

作品募集規定

(役員・審査会員・審査会員候補)

部 別

漢 字 部 (創作および臨書)
か な 部 (創作および臨書)
現代詩文書部
篆刻・刻字部 (創作および臨書)
前 衛 書 部

出品作品

役別、所属部の作品を1人1点出品する。
(他部門への出品はできない。)

審査会員・審査会員候補作品寸法

たて・よこ自由
仕立上がり最大寸法(下記寸法以内)
・篆刻・刻字部も下記寸法以内

審査会員

A	60cm (2 尺)	180cm (6 尺)
B	73cm (2.4 尺)	150cm (5 尺)
C	90cm (3 尺)	120cm (4 尺)
D	105cm (3.46 尺)	105cm (3.46 尺)

審査会員候補

E	51cm (1.7 尺)	172cm (5.7 尺)
F	90cm (3 尺)	90cm (3 尺)
G	70cm (2.3 尺)	120cm (4 尺)

審 査・褒 状

審査会員、審査会員候補、無鑑査作品のなかから審査し、優秀な作品に次の賞をおくる。

○審査会員に対する賞

(名誉会員、参与会員、選考委員を除く)

1. 峰 雲 賞 (各部を通して) 1名

○審査会員候補に対する賞

1. 書道芸術院大賞 1名
(各部審査会員候補の作品のなかで最も優秀な作品に与える)
1. 書道芸術院準大賞
(各部を通して) 5名
1. 白雪紅梅賞
(各部を通して) 若干名

○無鑑査に対する賞

出 品 目 録

本院で定めた出品目録に必要事項をもなく、正しく、楷書で記入すること。
記入は本人自筆のこと。
なお出品票は、枠・額の裏面右上に貼付すること。
※本年よりバーコード入力出品目録です。ご注意下さい。

陳 列

一般公募作品は入賞作品を展示する。
陳列に不適当と思われる作品は運営委員会にはかって、陳列辞退していただくこともある。

搬 入 (審査会員、審査会員候補)

1. 書類搬入——平成20年1月23日(水)
郵送および持込みの場合は、
〒101-0031東京都千代田区東神田1-16-7
神田芝崎ビル3階 書道芸術院内
書道芸術院展事務局 宛
2. 作品搬入——平成20年1月29日(火)
上野公園 東京都美術館 B 3
書道芸術院展事務局

搬 出 (審査会員、審査会員候補)

1. 作品の搬出
平成20年2月12日(火) 9時~12時
東京都美術館 B 3
2. 搬出日(2月12日)に引き取られない作品については後日、本院では保管の責任を負わない。
3. 作品の返送は本院で取り扱わないので、関係業者に連絡されること。

搬入に関してのご注意

- ・第61回展の役員書類搬入は、表具店経由で行うこと。
- ・表具店には次のように通知。
④受付名簿 ⑤受付番号の先渡し
表具店あてに作品と共に、出品目録を渡すこと。

出品目録は、

- ⑦諸事項をもなく記入する。
- ④①~④まで切りはなさず、全部を渡す。
出品表は、表具店が番号記入の上、作品裏面にはる。
- ・特に地方の表具店の場合、送付に日数を要するので、早目に表具店へ渡すこと。
- ・出品目録の右隅にある先生名は、取扱先生名を必ず記入すること。
- ・搬入事務は1日で完了のため、地方から送付の場合、早目に送付のこと。

枠・額について

枠・額等は陳列上、破損のないもので出品すること。
(輸送中のガラス破損についても注意。)

その他

- ・作品の審査、陳列などについて異議の申したてはできない。
- ・出品物はつとめて保護に当たるが、天災その他不可抗力によって生じた事故についてはその責任を負わない。

◇会費について

- ・書道芸術院役員は会費制。
年会費は、毎年8月末までに納入すること。
- ・未納の方は出品できないので、至急払い込むこと。
(所定の振替用紙不足の方は、院事務局まで)

第61回 書道芸術院展

一般公募・無鑑査作品募集規定

締切：平成19年11月30日（金）

一般公募作品は入賞作品を展示する。

部 別

漢字部（創作および臨書）
かな部（創作および臨書）
現代詩文書部
篆刻・刻字部（創作および篆刻）
前衛書部

出品点数

一 般…1人各部1点（2つ以上の部に出品することもできる）
無鑑査・審査会員候補・審査会員…役別、所属別の作品を1人1点出品する。
（他部門への出品はできない。）

応募資格

所属団体に関係なく、義務教育修了者なら誰でも出品できる。

一般公募、無鑑査作品

- 書作品は表装しないでまくりのまま出品する。
- 作品仕上寸法（最大寸法）（額・枠の寸法）縦横自由

書作品

J	90cm（3尺）	60cm（2尺）
K	30cm（1尺）	172cm（5.7尺）

篆刻作品

L	30cm（1尺）	39cm（1.3尺）
---	----------	------------

刻字作品

M	51cm（1.7尺）	60cm（2尺）
N	30cm（1尺）	90cm（3尺）
O	35cm（1.2尺）	67.5cm（2.2尺）

無鑑査

H	42cm（1.4尺）	150cm（5尺）
K	70cm（2.3尺）	90cm（3尺）

- ・規格寸法以内なら用紙の大きさは自由
- ・作品表面右下隅に「出品目録」中の6の「まくり出品票」を貼り付けて出品する。
- ・2枚以上の紙でまとめた作品（連や対のもの）はその旨を表す付箋を付けクリップでとめる。
- ・篆刻・刻字作品は陳列できる形体で出品。

出品目録

本院で定めた出品目録用紙に必要事項を記入し、出品手数料と同時に提出する。
篆刻・刻字作品と陳列作品の出品票は、額・枠の裏面右上に貼り付けること。

出品手数料（一般公募）※無鑑査以上は所定の年会費を納入

30歳以上 7,000円
30歳未満 3,000円（H20.1.1現在）

*初出品で30歳未満の方は生年月日を証明するもの（保険証、学生証など）のコピーを出品票に添付する。（前年以前出品者で出品票が印字されている者は必要なし）

鑑 別

一般公募作品は鑑別し、入選作品には入選証をおくる。

審査・褒状

一般入選作品のなかから審査して次の賞をおくる。

1. 準 特 選 （各部）若干名
1. 佳 作 （各部）若干名
1. 褒 状 （各部）若干名

無鑑査に対する賞

1. 院 賞 （各部）若干名
1. 毎日新聞社賞 （各部）1名
1. 特 選 （各部）若干名
1. 秀 作 （各部）若干名

無鑑査、一般公募出品方法

①団体出品の場合

- ・団体名簿に記入の上、出品する
（団体番号は団体出品される先生に配布済み）

②個人出品の場合

- ・作品、出品目録、出品料が同時に着くように送付する。

搬 入（締切）無鑑査、一般公募

期日 平成19年11月30日（金）

送付先

101-0031 東京都千代田区東神田1-16-7
神田芝崎ビル3階 財団法人書道芸術院内
書道芸術院展事務局

- ・郵便（宅配便）の場合は、期日までに必着のこと（締切厳守）
- ・出品手数料は団体の場合同封の「郵便振替用紙」で納入。（持ち込みの場合は現金でも可）

陳列作品の搬入

- ・陳列作品は各自（各団体）で表装し
平成20年1月29日に東京都美術館に搬入する。
- ・篆刻・刻字作品は審査後本院で保管する。

搬 出（無鑑査、一般公募）

- ・作品の返送について（書作品・まくり）
書作品は鑑別審査終了後、すべて返送する。
（陳列作品は、表装して再搬入）
- ・一般公募作品篆刻・刻字作品は鑑別審査後本院で保管し展覧会終了後搬出する。
- ・作品の返送は本院で扱わないので関係業者に連絡のこと（搬出日以後の作品については本院で責任を負わない）

その他

- ・応募作品の鑑別、審査、陳列について異議の申し立てはできない。
- ・出品作品には細心の注意を払うが天災などの不可抗力によって生じた事故については責任を負わない。

ウィーン展訪問団紀行



第10回記念書道芸術院
ウィーン展

本院は、役員・谷脇梅翠君がウィーン日本人学校長として赴任したのが縁で、毎年欠かさず「書のワークショップ」を継続してまいりました。この草の根交流10周年と、本院創立60周年を記念して、院の役員作品約70点を展示します。

2007年8月

財団法人書道芸術院
理事長 恩地春洋

SHO 書道芸術院創立60周年記念
ウィーン展図録あいさつより

理解深める

ワークショッ
プ

参与・审查会员

谷脇梅翠

24年前、文部省から海外研修の辞令を受け、ウィーン日本人学校長として赴任した時には、今回のように書道芸術院創立60周年記念ウィーン展と、第10回記念書道芸術院高知選抜ウィーン展と同時にワークショップが実施されることは、全く我々の視野にはなかったことです。

この行事が人々に感動を与え、成果をあげることができたのは、駐オース



表彰を受ける谷脇梅翠先生

わけです。作品の文字内容は、和、夢、愛、誠、平和、安心、希望、友情、幸福、信頼、元氣、思いやり、仲良し、等その他でした。

そして、国名や本人名を発音通りにカタカナで楽しく書く一日でした。

そして、2年後には十分な計画のもとに書道芸術院ウィーン展を本部から100点の出品をいただいて、中心部の宮殿を借りて展示することができました。

1988年10月には毎日書道会創立40周年記念展を国立民族博物館で盛大に実施することができました。

その間、書道に對しての関心が少しづつ市民の間に湧いて來たように思いました、それはまだ興味本位の珍しさの域であつたようです。

その後、高知関係の書道愛好家展や土佐女子高校生書道部展、10年連続で高知県小中学生優秀作品展（高知新聞社主催）をウィーン日本人学校生徒の秋の作品発表展に仲間入りさせていた

トリア日本大使館の梅津大使をはじめ
味尾所長をリーダーに広報文化センタ―
職員の方々のすばらしいご協力、ご援
助をいただいたことです。

私をこの長い期間の文化交流の発展
へと心を動かしたものは、赴任年の11
月下旬、国連婦人部主催のバザー行事
でした。ウィーン市内の大
きな体育館の会場で、世界
各国の人々が集合しお国自
慢の物品を販売し、その収
益金を世界の貧しい人々に
贈るのです。



私は日本の代表として、毛筆書の揮毫を依頼され、10時から17時まで休む間もなく、色紙、半紙、計350枚に書き続けました。予想外に書作品希望者が多かった



「友好平和」揮毫する谷脇梅翠先生

だき開催することができました。

日本大使館の建物がリング沿いの一角に新装移転することによって、新しく多目的ホールが設置されることにな



恩地理事長揮毫

りました。

早速この場所を利用する許可を得た私達は第一回書道芸術院高知選抜ウィーン展を企画し、展示発表をすると共に、大使館側の希望をもとにワークショップを実施することにしました。

今年のワークショップに参加された方々が、よく努力し、向上心に燃えていたことは10年の歩みの成長だったと思います。興味本位の参加者がいなくなり、日本文化に関心のある方、日本留学をした方、ウィーン大学日本学科で勉強した方、両親のどちらかが日本



牧 泰濤先生揮毫

人の方、日本人で数10年も永住している方等の集まりを本当に嬉しく思いました。今後の課題としては、楽しく学習が続けられること、添削の充実等、芸術院の皆様から貴重なご意見をいただければ幸いです。よろしく願います。

「継続は力なり」のもとに地味な企画による10年の行動でしたが、今年度は梅津大使より若干名の関係者に身に余る感謝状をいただきました。たいへん有難く思っています。

日本大使館及び書道芸術院役員の皆様、すばらしい作品を毎年出品された同志の方々に深く感謝いたしましてペンを置きます。

「ウィーンの風」はさわやかです。



ウィーンワークショップ（大使館交流センター）



ウィーンワークショップ（市民大学）



ウィーン市内観光

ウィーン展に

参加して

九州支部

牧

泰濤

旅という字は𠂔（旗）と𠂔（人が並ぶ）から成り、旗の下に人々が連れ立って歩くという意味である。従って、現在の旅行形式は字源に忠実且つ正しいといえなくもない。昔も今も旅は、想定外のトラブルはつきものであるとすれば、友がいることは心強い限りである。「旅は道づれ、世は情け」のことわざがあることもうなずける。

8月20日、本院恩地理事長以下総員28名の旅行団を編成し成田空港からウィーンへ向かった。海外展第一弾のダブリ



ミラベル宮殿観光

ン展、今回のウィーン展に参加できた幸せを今有難く思っている。書道界における海外展の草分けの本院ならではの記念事業であることを誇りに思う。この計画を知ってから、以前より一度は訪ねたい国であったので楽しみにしていた。

第1日目は、機中とウィーン泊で終わった。

第2日目は、午前中、市内観光、午後は、日本大使館とヘルナス市民大学で展示作品の鑑賞、15時からデモンストレーション、18時からオーブニングセレモニーを同大学内で実施。20時、ヒルトンホテルで祝賀夕食会を開催した。在オーストリア日本国大使館より、梅津至大使、同御令室様、妹尾創様、亀山知美様はじめ、区長、前区長、校長、新校長さん方10名がご出席くださった。

た。

以下、私は主として観光面からの感想を記したいと思うのである。

第3日目は、私は、参加して、はじめて、本展の意味の重さと実績の貴さを目のあたりにすることになった。というのは、この日の観光を済ませて、郊外のホイリゲ(新酒ワインを飲ませる居酒屋、ワインケラーの一種)で夕食の時である。ワークショップの本部役員団と観光団合同でお互いの異国での初顔合せの席である。そこにゲストで示野由香さんが出席くださった。聞けば、谷脇梅翠先生勤務の土佐女子高出身で、以前のウィーン展ツアーに参加してそのままここに止まって18年。プロを目指して音楽の道に励んでいるとのこと。食事がすすみ、賑わってきたところで、谷脇先生より紹介があった。「今では立派な当地でのプロ。こんなところでは滅多に歌わない身分だが、恩師の依頼ではしかたない」と。快諾。熱唱。部屋の天井を突き破るようなソプラノの力強く美しい声、頭の骨をつき抜けて出ているような高い音声、一同ビックリ。他国の人が2人入口で聞きはれていた。同胞としてのものしくうれしい限りであった。「2年前にお会った時は清楚な感じをうけてたけど、ヘアースタイルもすっかりプロの雰囲気に変身だわ」と川島舟錦さん。谷脇先生が日本人学校校長の勤務をご縁に、今日まで継続してきた国際交流の実績は、単に書道普及だけでなく、本場で通用するプロの音楽家も輩出していることを知り改めて敬服した次第である。彼女は、今年11月に東京公演で帰国とのこと楽しみにしている。これに先だって、日中は、シェーンブルン宮殿へ。ハプスブルグ家の栄華の極致、名称に違わぬ美しい泉だった。整備された広大な庭園、ナポレオンも使用したし、ウィーン会議もここ、世界史の舞台なのだ。1400室の中の40室のみ公開中とか。バイオリンを奏でる黄金色のヨハンストラウス2世像。モザイクの屋根が美しい。800年の歴史を誇るウィーンのシンボル、シュテファン寺院等を観光した。

第4日目は、専用バスで湖水地帯へ。ザルツカンマーグート(塩の御料地)、ハルシュタット村へ。1965年公開の映画「サウンド・オブ・ミュージック物語」の舞台となった景勝地、2000m級の山と50の湖に囲まれた美しい自然いっぱいの世界で一番美しい湖畔の町は世界遺産でもある。そしてモーツアルトゆかりのサンクト・キルゲンからサンクトヴォルフガンまで、一時間湖上遊覧。陸を離れて観る山々は又一段と目にやさしい。気が休まり湖面を吹きくる風が快かった。下船し、又、バスで30km。ザルツブルグへ向かう。

第5日目は、ザルツブルグの朝は夜来の雨も上がっていた。不思議と今回は夜に雨が降って日中は晴れと絶好調であった。北のローマと称されるザルツブルグ(塩の城)。モーツアルトが幼少期を過ごした街は、決して好い環境ではなかったと思われるが、天才は挫折しなかった。「モーツアルトは、目的の地なぞ定めない。歩き方が目的の地を作り出した。彼はいつも意外なところに連れていかれたが、それがまさしく目的を貫いたという事であった。」(モーツアルト)「小林秀雄の言葉」・新潮社編)を少し納得できた。1920年のスタートの「ザルツブルグ音楽祭」は、第一次大戦後の国民のすさんだ心を癒すべく始めたという。芸術は沈む心に勇気を与える活動でありたいと思う。書道も絵画もそうありたいものである。一番の雑踏の通りに面してモーツアルトの家があり、近くは、意匠を凝らしたカンパンが懸かるケトライデ



ノイシュバインシュタイン城観光

出品券

12月15日締切

ガッセ通り、意外であった。メロディや旋律は喧騒の中にこそあるのかも？。ミラベル宮殿と庭園も美しい。例の「サウンド・オブ…」のマリアと子どもたちが「ドレミの歌」を歌うシーンのロケ地。ファはファイトのファの撮影地点で、私もファイトのポーズで一枚。午後はザルツブルグから国境を越えて（簡単なのに拍子抜け）独国のホーエンシュバンガウへ。250kmバスでひた走る。途中の広大な牧草地、点にする農家。整頓された薪、補修用の材木ときれいな庭と樹木、牧畜に生きる人々の姿勢が車窓より見てとれる。まさにロマンチック街道のネーミングにふさわしい。

やと白鳥の城といわれるノイシュバンシュタイン城へ。私2度目である。昭和62年、21年も前、文部省派遣教員海外教育事情視察団（ハンガリー、西独、米国）に参加した時以来である。その時より城壁や内部が整備されている。城郭へのアクセス、チケット販売法や入口の誘導アナウンス、出口の売店など経営色が強くなっていた。形あるものは壊れる。朽ていく姿にこそ美があり、歴史ができる。修復や防止

をした時には、そのものの歴史は終点と思うのだが、内外を問わず、観光地はいずれも同じである。

この後、150km走って、ミュンヘンへ。夜は勿論ビール。3500人収容可能というビヤホール「ホーフブローイハウス」へ。手首が痛む程の大ジョッキを傾けあった。そして大声で歌い踊りはじけた。最後の夜でみんなの心は完全に一つになった。院内活動の同志となった。

第6日目。世界6大美術館の一つ。アルテ・ピナコテークへ。14〜18世紀の約7000点の古典絵画をはじめ、ダヴィンチやラファエロなど見尽せぬ名品が収蔵されていた。ゆっくり一週間程かけて鑑賞したいものだ。マリエ広場の例の時計塔は建物そのものの修理中で、仕掛けも12時にほんの数分。早々とランチへみんな急ぐ。白や赤のソーセージ尽しにビールのランチで旅のしめくくりの気分になる。免税店で最後の買物をしつかり。ミュンヘン空港へ。フランクフルトで乗り継ぎ、成田APへと機中の人となった。10時間後全員無事帰国。

「日本は世界に於て、只特殊性・日本

的なものの尊重だけではない。そこには真の文化はない。……つまり自家用の文化ではない。自ら世界的な文化を造り出さねばならぬ。之が最も重要な事と思う。」「西田幾多郎——生きる」と哲学」藤田正勝著より

総団長 恩地 春洋
団長 谷脇 梅翠
秘書長 辻元 大雲
秘書 前田 龍雲
顧問 糸賀 靖夫（毎日書道会）
吉良 憲彦（高知新聞社）
安藤 敏行（藤和額装）

班長 千葉 蒼玄
辻元美智子 大川 百雲 片山 恵風
菊地富美子 菊地 大輔 積田恵美子
長井 孝子 伯ヶ部総龍 玉野 浩水
濱野 琴爽 山本 春英 川島 舟錦
五藤 真世 柴岡 理恵 三谷真一郎
山本 久子 和田 理康 牧 泰清
児玉 頼光 堂本 暁生（毎日新聞旅行）

表紙写真 「薦季直表」

予告

◇12月号の課題

漢字規定（初段以上）

萬里無片雲

漢字規定（秀級以下）

一以貫之

かな規定（初段以上）半紙（料紙可）

ばら色に空くゆらして冬の日は沈みさりけり屋なみの上に

（窪田空穂）

かな規定（秀級以下）料紙（料紙可）

「よひのまにいでゝいりぬるみかづきのわれてものおもふころにもあるかな」

のうたを全臨または、部分（二字以上）の連綿を臨書する。

かな条幅規定（料紙可）

心ひまあれば桜花こぼす

（高浜虚子）

漢字条幅規定（初段以上）

松下問童子 言師採薬去

只在此山中 雲深不知處

漢字条幅規定（秀級以下）

居身百尺樓上

放眼萬卷書中

ペン字規定

冬はつとめて。雪の降りたるは、

いふべきにもあらず、下のいと白きも

又さらでもいと寒きに、火など急ぎ

おこして、炭もて渡るもいとつきつき。

昼になりて、ぬるゝゆるびもていけば

火桶の火も向き灰がちになりてわろし。

清少納言「枕草子」より